絵本の説明も漢字だとわかる

漢字には、以上のような性質があるので、幼児に喜ばれるのです。つまり、むずかしいなどというものでは全くありません。努力なし、負担なしで覚えられるのです。

ですから、絵本に、かなばかりを使うことくらい愚かなことはないのです。幼児にわかりにくいかなを使ってわざわざむずかしくし、おもしろくないようにしているのですから。もし漢字が多く使われていたら、子どもたちがどんなに喜んで本を手にするかしれません。

わたしが、このことを絵本を出している人に話したところ、「おっしゃることはもっともと思います。ただ、それでは世の中のお母さんたちから文句が出るでしょう。買ってもらえない。それでは出すわけにはいきませんので」ということでした。

先に幼児開発協会の講演会で、理事長の井深大氏が「母親が考えねばならぬこと」という話をされましたが、その中で「今日の教育というものは、わざわざ、子どもにとってわからなくなる、あるいはむずかしくなる年齢まで待って、それから一生懸命やらせている。子どもが受けつける時期をすぎてから、一生懸命詰め込もうとして、親も学校も社会も苦労しているのではなかろうか」とおっしゃっていました。この指摘は、漢字教育だけとってみても、正にその通りなのです。

幼児期に学ばせれば、まったく自然に、覚えようという苦労もなく習得し、そのために楽しく読書できるようになるものを、記憶力の衰えた時を待って学ばせているのです。この誤りから、まず世のお母さん方が脱け出していただきたい。それは子どもの将来のために、想像以上にだいじなことです。